

音楽Iテスト	西洋音楽史 (古代ギリシア、中世、ルネサンス)		教科書 『高校生の音楽1』	P.117 西洋音楽史 古代ギリシア		
	氏名		得点	/50点	評価	

① 「西洋音楽史」の「古代ギリシア」について、次の問いに答えなさい。

1) 古代ギリシアの音楽について、正しい文章になるように () の中から1つ選び、○で囲みなさい。(各2点=6点)

古代ギリシアでは、宗教儀式や演劇、労働、娯楽に至るまで、音楽が必要不可欠だった。(科学者 音楽学者 哲学者) たちは、世界の仕組みを知るためには (科学 哲学 音楽) を学ぶことが必要だと考えていた。この時代の音楽に対する考え方や音楽理論は (西洋音楽 民族音楽 伝統音楽) の土台となり、現代にも大きな影響を与えている。

2) 古代ギリシアの音楽について、説明として正しい文になるように () の中から1つ選び、

○で囲みなさい。(各2点=8点)

- ア 「アウロス」という管楽器や「キタラ」という (弦楽器 打楽器 鍵盤楽器) が使われていた。
- イ ヨーロッパの多くの言語で「音楽」を意味する語は、(フランス語 ラテン語 ギリシア語) が語源である。
- ウ 古代ギリシアの演劇は、16世紀に生まれる (ミュージカル オペラ オラトリオ) の源流となった。
- エ 2本の弦の長さが整数比になるときにハルモニアが生まれることを発見したのは、(アリストテレス ピュタゴラス プラトン) とその弟子たちである。

② 「中世」の音楽について、次の問いに答えなさい。

1) 中世の音楽について、正しい文章になるようにア～カに当てはまる言葉を下から選び書きなさい。

- ハルモニア オラトリオ グレゴリオ イタリア ラテン ギリシア
アンサンブル オルガヌム 単旋律 副旋律 ネウマ シンフォニー
数字 文字 装飾 モノフォニー ポリフォニー

(各2点=12点)

中世では、フランク王国がローマ教皇と手を結んで権威を獲得し、キリスト教とともに礼拝のための聖歌が広く伝わった。

キリスト教会において (ア) 語で斉唱されていた (イ) の聖歌は、「(ウ) 聖歌」としてまとめられた。やがて聖歌の旋律に新たな声部を加えて歌う「(エ)」が生まれ出され、しだいに加えられる声部の数が増えてその動きも装飾的になり、音楽の響きがより豊かになった。このように、独立した複数声部による音楽を「(オ)」という。また、10世紀頃からは、(カ) 譜が使われ現在の五線記譜法の源流となった。

ア	
イ	
ウ	
エ	
オ	
カ	

2) 中世の世俗の音楽について、説明として正しいものを次から2つ選びなさい。

ア 教会の外でも、日常的に歌と踊りが親しまれていた。

イ 宮廷に仕えた世俗音楽家は、北フランスではトルバドゥールと呼ばれた。

(各2点=4点)

ウ 宮廷に仕えた世俗音楽家は、ドイツではミネゼンガーと呼ばれた。

エ 世俗音楽家は、主に狩りを題材とする単旋律の歌曲をつくった。

--	--

③ 「ルネサンス」の音楽について、正しい文章になるように () の中から1つ選び、○で囲みなさい。(各2点=20点)

ルネサンスの音楽家たちは、ヨーロッパ各地の流行を取り入れながら、工夫を凝らして(シンフォニー モノフォニー ポリフォニー)の音楽をつくった。特にイギリスからもたらされた3度や6度の音程は、ルネサンス特有の響きを生み出した。また、声部の増加、各声部の独立が進み、ある声部の旋律や音型を異なる声部でまねる(「模倣 反復 装飾」という技法が発展して、均整のとれた響きをもつ(オーケストラ 室内楽 合唱)作品が多く生まれた。ブルゴーニュ楽派のデュファイは、イギリスから3度や6度の響き、(フランス イタリア ドイツ)から甘美な旋律を取り入れて作曲した。(ブルゴーニュ フランドル ノートルダム)楽派のジョスカン・デブレは、各声部が均等に「模倣」を行う技法を完成させた。

ドイツで宗教改革を先導した(ルソー ルター カルヴァン)は、ドイツ語で歌う(コーラス ゴスペル コラール)を礼拝に導入した。また、楽譜印刷技術の開発によって、(演奏家 作曲家 声楽家)の名前が人々に知られるようになり、各地の音楽様式が影響し合う機会も増えた。

宮廷や都市では世俗の声楽曲や器楽曲が盛んに演奏された。感情をありありと表現する声楽曲が歌われるようになり、管楽器や(弦楽器 打楽器 鍵盤楽器)なども発達した。声楽曲の伴奏には、(ギター ヴァイオリン リュート)やハーブなどが多く用いられた。